

三好文夫と「アイヌ」・「和人」表象―「人間同士に候えば」における「見る」ことの放棄と再獲得―

真鍋 秀聡

一 はじめに

二〇一四年八月十一日に金子快之札幌市議会議員が、ツイッターにおいて「アイヌ民族なんて、いまはもういないんですよ。」と発言した。この発言に対し様々な方面から批判の声が寄せられ、自民党札幌支部連合会は九月九日、党紀委員会と総務会を開き、金子議員を党から除名した。この金子市議に代表される「アイヌ」に関するヘイト・スピーチが飛び交う昨今、「アイヌとは」またそれに対する「和人とは」ということについて、私たちは改めて考える必要があるだろう。

「アイヌ」と「和人」について考えるにあたり、生涯一貫して「アイヌ」と「和人」を小説に描き続けた作家、三好文夫の仕事がその助けになると考えられる。三好文夫は「アイヌ」を取り巻く問題は「アイヌ」だけの問題ではなく、「和人」も含めた広く人間全体の問題として考えていくべきだととらえ、その問題を「アイヌ・和人問題」と称して作品に描いている。三好文夫の作品を分析するにあたり最も注目すべき点は、作者である三好文夫が常に「和人」という立場に置かれ、「和人」という立場から「アイヌ」と「和人」を表象している点である。「アイヌ」について語る際、三好は否応なく「アイヌ」の他者としての「和人」という枠に入ることになる。では三好はこの「和人」という立場をどのように受けとめ、「アイヌ」と「和人」の表象を行って

いたのだろうか。このような「和人」という立場を自覚しつつ、広く「アイヌ」と「和人」のかかわりを描こうとする作家を研究することは、「アイヌとは」、「和人とは」という問題を見つめ直さなければならぬ今日、意義のあることだと思われる。

本論では三好文夫の遺稿「人間同士に候えば」（なお本論における本作の引用と頁数はすべて『人間同士に候えば』（一九七九年、水兵社）による）を取り上げ、三好文夫がどのように「アイヌ」と「和人」とらえたのか、そして「アイヌ」と「和人」の表象を通して彼の言う「アイヌ・和人問題」をどのように作品に描き出しているのかということ考察する。「人間同士に候えば」のあらすじは次のようなものである。北方領土復帰運動の署名活動を行っていた新井田慎治は、謎の人物である「あいつ」に「寛政蝦夷の乱を知っているか」と尋ねられる。慎治は「あいつ」との出会いを機に、新井田孫三郎の記した「寛政蝦夷亂取調日記」をもとに新井田孫三郎が訪れた土地を巡り、寛政蝦夷の乱がどのようなものであったかを突きとめようとする。道中偶然知り合った高林啓子とともに旅を続けながら、慎治は「あいつ」とかつての妻美雪の幻想にとりつかれ、次第に精神が病んでいく。

作品について石川郁夫は「遺作となった長編『人間同士に候えば』では、『返せ北方領土、われら父祖の地』と叫ぶ場合の“父祖の地”の

“父祖”のなかに、しっかりと先住民の“父祖”が位置づけられているかを鋭く問い、都合の良い時だけ（人間同士）なのだから、と使い分けをする許しがたい日本人の論理の欺瞞性、虚妄性を突いている。」と述べている。また岡和田晃は二つの著書の中で本作に触れているが、「アイヌ」最後の大規模蜂起と言われるクナシリ・メナシの戦い（一七八九）に切り込んだ本書は、切実な情念とヴィジョンが横溢する問題作だ。（中略、本論における中略はすべて論者による）無意識のうち「アイヌ」を蹂躪し、差別意識を歴史認識レベルで保持し続けている「和人」の原罪を、鋭く糾弾してみせる。」^二、「アイヌ」最後の大規模蜂起と言われるクナシリ・メナシでの虐殺という過去の痛みを、今を生きる「和人」がいかに引き受けることが可能か、正面から模索している。」^三というように本作を評価している。両者とも「和人」のもつ差別意識、欺瞞性を暴きだしている点で本作を評価しているといえる。確かに「和人問題」を重視していた三好がシャクシャインの戦い同様、歴史の裏に隠された「和人」の罪を明らかにする意図をもっていたことは間違いないだろう。しかし本作の描写を細かく分析していくと、「和人問題」を起点に、より広範囲に渡る問題を提示しようという三好の意図が読み取れるのである。次節以降、本作の描写を分析しながら三好が提示しようとしている問題に迫っていく。

二 描かれない「皇国史観」と「アイヌ」

三好丈夫作品の中には、「天皇」や「皇国史観」といった言葉が作中に見られるものがいくつもある。それらの言葉は主題に大きくかかわることはなく使用頻度も少ないものの、作中における「アイヌ」の惨状を生み出している原因として語られている。三好の「皇国史観」に対する考えを探るにあたり、彼の著書『アイヌの歴史―神と大地と獵

人と―』を参照したい。この著書は歴史書という形で「アイヌ」についての様々な情報をまとめながら、著者三好自身の強い思いと主張が提示されている。本著の中では繰り返し「皇国史観」や「単一民族国家」という言葉が使用されており、三好は「アイヌ」を取り巻く問題と「天皇」が密接にかかわっていると考えていることが読み取れる。本著において「皇国史観」や「単一民族国家」という言葉は例えば次に引用するようなどころで使用されている。

北海道旧土人保護法に保護された“偽コタン”は、アイヌ本来の生業である狩猟を断じ、農耕を押しつけ、土人学校を開いて“聖旨”を教えた。そこには、アイヌ人がその民族的背景として守るべき信仰や、伝えるべき文化に対するなんの措置もとられなかった。（中略）

北海道旧土人保護法は、あるいははじめから、それを意識して制定されたのかもしれない。単一民族国家であるという“皇国史観”は、たとえ少数でも異属であるアイヌ人の存在をきらったのかもしれない。貧窮にも不平をいわず、耐えて黙々と働き、いったん事あるときには兵卒となつて天皇に殉じて悔いないというような、アイヌ人をそういう“下層日本人”化することを、ねらいつつ進めていたのであつたらう。^四

この叙述からは、「アイヌ」に対する劣悪な政策や法律、そして「アイヌ」の存在を否定し差別する意識の形成の裏には、すべてこの「皇国史観」が潜んでおり、「皇国史観」こそが「アイヌ」を取り巻く問題の元凶であるという三好の考えが読み取れる。このような「皇国史観」への強烈な批判意識は本著をまとめる際に作り上げられたが、おそら

く三好はそれ以前から「皇国史観」を問題視しており、作品の所々で話題としていたのだろう。

しかし本作「人間同士に候えば」ではそれまでとは一変し、「皇国史観」など天皇に関する言葉が一切使用されていない。「アイヌ・和人問題」に取り組むために執筆活動を行っていた三好が、問題の元凶だと考えていた「皇国史観」に一切触れていないのは不自然であると言える。その不自然さは、題材となっている寛政蝦夷の乱と「皇国史観」の関係性からも言えることである。寛政蝦夷の乱は「アイヌ最後の蜂起」ともいわれる一七八九年に起こった戦である。この戦いは本作では「和人」に隠蔽された出来事として描かれているが、その理由は「人間同士に候えば」の前に発表されたシヤクシヤインの戦いを題材とした小説「シヤクシヤインが哭く」（一九七二年）で「わたし」が考えたように「天皇を中心とする単一大和民族を主張しとおすため」だと考えられる。またこの乱は北方領土の歴史にも記されていないことが書かれているが、それも「わたし」が考えるように「ロシアに対する領土問題がからんでいた」ためだろう。シヤクシヤインの戦いも寛政蝦夷の乱も、「和人」が「アイヌ」からその土地を略奪した出来事であることは共通しており、それが語られなかった理由はすでに「シヤクシヤインが哭く」の「わたし」が「皇国史観」に関連づけて提示しているのである。それにもかかわらず本作で「皇国史観」に関する言葉が一切見当たらないのはなぜだろうか。

本作の不自然な点はもう一点挙げられる。本作は「シヤクシヤインが哭く」と構造が類似しており、慎治と啓子が共に旅をする「現代部」と寛政蝦夷の乱を描いた「過去部」が交互に配置されている。本作の不自然さは、「現代部」において描かれる「アイヌ」が慎治の回想の中に登場する彼の妻美雪だけであり、「現代部」の現在軸において「アイ

ヌ」表象は一切存在しないという点である。三好のこれまでの手法としては、「アイヌ」と「和人」が言葉を交わし、密接に関わり合いながら「アイヌ」を取り巻く問題を提示し考えていくというものだったが、本作ではその「アイヌ」と「和人」の密接な関わり合いが描かれていないのである。なぜ三好はこれまでと異なり、「アイヌ」と「和人」の密接なかわりを描かなかったのだろうか。

このように本作は、これまでの三好作品で度々描かれていた「皇国史観」と「アイヌ」が描かれていないという点で特徴的である。三好はこれまで差別に苦しむ「アイヌ」の姿を描き、その元凶として「皇国史観」という「和人」の意識があることを暴いた。それらが描かれていない効果を考えるならば、本作は寛政蝦夷の乱を題材としつつ、「アイヌ・和人問題」に終止しない、より広い問題を提示しようとしているのではないかということが見出せる。

三 「見る」ことの放棄

本作は、北方領土復帰運動に参加する新井田慎治のもとに、謎の男「あいつ」が訪れる場面から始まる。慎治は「あいつ」に「寛政蝦夷の乱を知っているか」と尋ねられるが、慎治はこの寛政蝦夷の乱の内容ではなく、言葉そのものを知らなかった。

もちろん俺は、そういう史実をまったく知らなかった。中学校の時も、高等学校でも習った覚えは無い。

“北方領土復帰期成同盟”が出しているパンフレットにも、“北方領土の歴史”として、寛永十二年（一六三五）に松前藩が蝦夷島と探検し、世界ではじめて国後島から占守島までの地図をつくり、さらに九年後には正保の図を完成したこと。（中略）安政元

年（一八五五）に日露通好条約を結び、両国の国境を択捉島と得撫島の間と決めた事など詳しく記されているが、「寛政蝦夷の乱」というのはどこにも見当たらない。

もっともそれは、北方領土復帰運動とは関わりがないという判断からかもしれないが、俺が知らなかったのは当然の事なんだ。

（六・七頁）

寛政蝦夷の乱は北方領土復帰期成同盟のパンフレットだけでなく、中等教育の場においても触れられていなかった。無知なのは慎治に限ったことではなく、寛政蝦夷の乱は広く社会から顧みられてこなかった出来事だと読み取れる。そこにはシャクシャインの戦い同様、過去の「和人」の侵略の歴史を隠蔽しようという「和人」の意識が窺われる。

また北方領土の歴史に記されていないのは、寛政蝦夷の乱は北方領土復帰運動に不都合な出来事だと判断されたからである。シャクシャインの戦いも寛政蝦夷の乱も、「和人」が「アイヌ」からその土地を略奪した歴史であり、北方領土復帰運動にとっては、目を瞑りたい出来事なのである。東村岳史は北方領土についての報道や著作などを調べ、次のように述べる。

二島返還か四島返還かという選択肢は報じられても、帰属・所有者として正当な権利を有しているのが先住民であるということが報じられる機会はほとんどない。「領土」交渉に声高な影響力を持つのは日ロ両国政府関係者、および日本側では日本人の旧島民に限定され、これら「領土返還」運動関係者が著してきた出版物においても（つぶさに調べたわけではないが）アイヌの権利を記したものなどはまず見当たらないだろう。^五

北方領土を語る際、その先住民である「アイヌ」の権利が顧みられることはない。それは東村が述べるように現在においても変わっていないと言える。北方領土は「和人」が「アイヌ」から奪った土地であったということは徹底して隠蔽されており、北方領土と寛政蝦夷の乱を関連づけて語るだけでも、十分「和人」の罪を暴く効果はあると考えられる。それは本作が発表された一九七六年から現代にまで引き継がれ、岡和田がいうように「今を生きる「和人」がいかに引き受けることが可能か」ということを考えさせる。本作はこのように「和人」から「見る」ことを放棄された寛政蝦夷の乱を中心に展開されていくが、本作で問題とされているのは見られてこなかった出来事ではなく、「見る」ことを放棄するという行為そのものだと考えられる。それは慎治と共に旅をする高林啓子という人物から窺える。

高林啓子は東京出身の二十三歳の女性であり、元看護婦である。彼女は自殺する場所を求めて北海道へ来るが、慎治と出会い行動を共にすることで当初の自殺計画が狂っていく。彼女は自殺を思い立った契機となった患者を、映画「ジョニーは戦場へ行った」のジョー・ボナムと重ねて次のように述べる。

「あなた、……“ジョニーは戦場へ行った”って映画、知ってる？」
「知らんな」

「アメリカ映画だったわ。第一次世界大戦の時、戦場にかり出されてた若者が重傷を負って、顔の無い頭と、胴体だけになってしまふの。軍医は、既に意識は無いものと判断して、実験材料として生命を持続させたのよ。ところが、ふとした事から、看護婦がその患者に意識がある事に気付くの。結局患者は、頭をベッドに

打ちつけてモールス信号を使い、『殺してくれ』と繰り返すの。
……シヨックだったわ、わたし」

女は、ふと大きく息を吸ってから続けた。

「それと良く似た患者の世話を、丁度わたし、していたの。身寄りのない若者だったわ。恋人らしい女の子が、はじめのうちはよく見舞に来ていたけど、そのうちに来なくなってしまった。眼は見えるようだったけど、口が効けないのよ。手足も麻痺したままだったから、女の子はいつも、ただじっと患者を見詰めているだけだったわ。工事現場で、足場から転落したというの。その恋人らしい女の子が、見舞いに来なくなってから、患者は治療や食事を拒むようになってしまったの。でもわたしは、彼の感覚の無い唇から、無理矢理に流動食を流し込まなければならなかった。ただ無残に、生きる事を強制された人間のむなしさを、わたしはそんな彼に感じないわけにはいかなかった。それがわたしの、最後の患者だった……」(七十六、七十七頁)

「ジョニーは戦場へ行った」は一九三九年にドルトン・トランボが発表した反戦小説『Johnny Got His Gun』を原作とした映画で、一九七一年に映画化、日本で公開されたのは一九七三年であった。カンヌ国際映画祭審査員特別賞、FIPRESCI賞、国際エヴァンジェリ映画委員会賞など、数々の賞を受賞しており、日本でも七二年度芸術祭大賞、一九七三年全国労映賞などを受賞し注目を集めた作品である。日本ヘラルド映画出版の「ジョニーは戦場へ行った」の映画パンフレットには、冒頭にドルトン・トランボの言葉が記載されており、その中では「見る」ことの必要性が次のように述べられている。

では、われわれ中にいるはずの30万名の戦傷者はどうだ？
彼らがどこにいるか、誰か知っているのか？(中略)

だが、こうした生ける屍のうちの何百人ないし何千人が確実にわれわれの眼に入っているのか？

われわれは知らない。問おうともしない。われわれは彼らから眼をそむける。われわれは彼らの眼や耳や鼻や口や顔をわざと見ないようにする。『なぜ、そんなものを見なければならぬのだ。私の過失のせいでもないのに。そうだろう？』と君は言う。だが、疑いもなくこれは君の過失に責任があるのだ、君の。六

ドルトン・トランボは「ジョニーは戦場へ行った」を通して、傷痕軍人の惨状を顧みないこと、「見る」ことの放棄を痛烈に批判している。では、ジョー・ボナムと似たような患者を目の当たりにした啓子は、どのような感情を抱き自殺を思い立つのか。

癒るあてのない、あの若者の、ただ命を持続するだけの生き様のすべてが、若者にはきつと苦痛でしかないのではないかと、そんな想いとらわれると、わたしはいつも、息苦しいほどの気怠さに襲われて、その場にうずくまっていた。

若者が療養所へ移されて行ったあと、わたしは空になったベッドの横に、呆けたようにぼんやりと立ち尽くしていた。若者を死なせてやるのが、わたしには可能だったのに……。若者はおそらく、わたしを恨みに思っているにちがいない。(二二二頁)

「ジョニーは戦場へ行った」の看護婦は、最後までジョーと向き合い、死を望むジョーの望みを叶えようと行動した。一方啓子は、言葉も身

動きも奪われ、ただ生きていくだけの患者を前に、うずくまってしまい、患者を前にして思考が停止してしまう。そして深く考えることをやめた彼女は自殺することを決意する。

わたしが最後に世話した患者、全身麻痺のあの若者は、今頃療養所でどうしているかしら。動かない唇の奥で、殺してくれと叫び続けているにちがいない。

よそう。思い出すと気が滅入る。(一一〇頁)

北海道に渡った後彼女は患者のことをわずかに思い出すものの、深く考えることはしない。本作において啓子は「アイヌ」に関わる問題と直接的な関係はもたないが、彼女もまた「見る」ことを放棄した人物として描かれている。

慎治や啓子の「見る」ことの放棄を責めるように、彼らが「見る」ことを放棄した対象は、反対に常に彼らを見つめ続けている。「あいつ」についての描写は、次に挙げるようなものがある。

俺は、あいつの顔を、あらためてのぞいた。昔帽子のひさしの下に、俺を凝視したまま動かない、いやな感じの眼があった。なんです、そのカンセイ……。

知らないから、そうやっていられるんだろうさ。

ふふん。とあいつは、眼玉は動かさずに嘲るように鼻を鳴らした。(中略) 両腕をわずかに広げた、綱渡りでもするかのような不安定な歩き方が、俺には踊るようにみえたのだが、その姿が人ごみにまぎれたあと、暫くの間あいつの視線だけが、俺の眼前に置き忘れられたように残っていて、俺を凝視しつづけたのだ。

あいつの、そういう眼付きが、俺はたまらなく嫌いだ。ねばつこい声色もいやだ。あいつのどこにも、俺が好感を持てる部分はない。(五頁)

取り上げた描写は一例だが、「あいつ」についての描写は動かない剥製ののような眼玉で常に慎治を凝視しているという点に焦点が当てられている。「あいつ」について啓子は、慎治が作りだした幻想ではないのかと疑うが、彼の正体が作中で明らかになることはない。しかし慎治は後に「あいつ」のことを「斬首された三十七人の亡霊」と形容している。慎治の言葉を借りるなら、「あいつ」は「和人」が「見る」ことを放棄した寛政蝦夷の乱で殺された「アイヌ」の亡霊であり、「和人」が「見る」ことを放棄したそのものだとと言えるだろう。また、啓子は世話をしていた患者をジョー・ボナムと重ねて見ているが、その患者は目が見えるという点でジョーと大きく異なる。そしてその患者は常に啓子のことを見続けていたのである。このように本作では「見る」ことを放棄された寛政蝦夷の乱を起点としつつ、北海道に縁の無い高林啓子という人物、そして「ジョニーは戦場へ行った」という反戦映画を取り入れることで、「アイヌ・和人問題」に限定せず広く「見る」ことの放棄を問題として提示していると考えられる。

四 「和人の痛み」の伝播

慎治は「あいつ」の言葉を受け、寛政蝦夷の乱を調べ始める。そして松前藩家老新井田孫三郎が隊頭となり乱の鎮圧にあたったということを知るのである。慎治が寛政蝦夷の乱を徹底的に調べようと思いついたのは、「あいつ」に唆されただけでなく、自分と同姓の人物がその乱の鎮圧に携わっており、孫三郎と自分との関係を明らかにしたかつ

たためである。しかし乱について調べ、自身の先祖にあたるかもしれない孫三郎が指揮した「アイヌ」鎮圧の歴史を知ること、慎治は孫三郎との関係を否定しようとする。そして初めは新井田孫三郎と同姓であることから、寛政蝦夷の乱をより一層調べる気になった慎治だが、調査をすすめるにつれ明らかとなった乱に至るまでの経緯や、場所請負人の「アイヌ」に対する仕打ちなどを知り、最終的に慎治は孫三郎個人との繋がりではなく「アイヌ」から土地を奪った「和人」の子孫として罪の意識を認識するようになる。

「……疑って、悪いか。俺は信じたくないんだ。……あなたは、こんな史実を突き付けられて、平気かい。稼ぎ方支配人、左兵衛という奴は、いや、殺された七十一人、みんな左兵衛と大同小異の連中だったろうさ。“横死七十一人之墓”を造った奴だってその仲間さ。連中の、俺は残念ながら子孫にあたることになるんだ。……あなたにはわからんだろうさ。国後島をふるさとだと思いついでいた俺は、眼も向けられんほど卑劣な、破廉恥な、俺の祖先の行為を史実として突き付けられて、とても鵜呑みにはできないよ。とても……な！」

(中略)

「そんなこと、いいじゃないの。……ずいぶん昔の事じゃない。長い歴史の間には、世界中に、いろんな出来事があったはずよ。いまさら、そんなふうに考え込むことはないと思うわ」

「いまさら……か。あなたはそれでいいさ。……だが俺はな、そういう史実をなにも知らんで、“北方領土の四百年は、日本人の歴史です”とメガホンで叫んだんだ。“呼び返せ、先祖の築いた北方領土”と訴えたんだ。俺は、俺の生地を、国際法の上からも

まさしく不当な占拠をしたソビエトを、怪しからんと思うさ。しかしどうだ。“北方領土四百年の日本人の歴史”の裏側に、ひそかに隠されてきた俺たちの“先祖”の罪業がまた、ひどく無残で、救われようが無いでないか」(一四四・一四五頁)

「アイヌ」から国後島を奪った「和人」の子孫として自己を認識し「和人」の罪を意識する慎治だが、それと同時に彼は現在「アイヌ」を差別する「和人」にも強い嫌悪を示す。その嫌悪には、彼の妻美雪が差別されたことが影響していた。

北方領土復帰運動の催しに、俺が参加を断わったとき、誘いに来た奴は胡乱な眼を俺に向けて、やつぱり、そうかい」と言った。そう言つて勝手に頷いたんだが、俺には、奴の言つた言葉の裏側がよくわかるんだ。「やつぱりお前は、夷族の肩を持つひねくれ者かい」と、奴はそう言いたかつたんだ。だが、奴はそんなふうに言つてはならん事を知っている。人間平等の旗印のもとに居るんだからな。差別なんぞした覚えは無いと思いついでいる。しかし、奴はそう思い込んでいただけなのよ。平等の思想よりも、美雪の背景に強い拒否反応を起こす“左兵衛の血”のほうが、奴には濃く流れているんだ。(二七七頁)

寛政蝦夷の乱において特に残虐な行いをし、「アイヌ」を毒殺したとまで言われる飛騨屋の支配人左兵衛に強い怒りを抱く慎治は、「和人」は全員“左兵衛の血”を継いでおり、その“左兵衛の血”が「アイヌ」を差別する意識の原因だと考えている。しかし自身を「アイヌ」を侵略した「和人」の末裔だと認識する慎治は、自分自身にも“左兵衛の

血”が流れていることを意識し自己嫌悪に陥ってしまう。

彼の妻、美雪が、夷人の血筋を引くという証拠を熱心に探り出して、わけもなく誹謗した“左兵衛の血”を引くシャモ達を、彼は心底から嫌悪し、憎しみさえ抱いているのだらう。けれど、そんな彼も、美雪という人の側から見れば当然、そのシャモの群れの中に在る人間なのだ。憎むべき者達の群れに彼は、自分の哀しい姿がまぎれこんでいるのを認めなければならぬにちがいない。

だから、彼がシャモと罵るとき、それは間も置かず彼自身に、冷やかな嘲笑となつて跳ね返っていくのだらう。(二三八頁)

「和人」のかつての罪業を知つた慎治は強く「和人」を非難するが、それは自己批判にもつながる。「和人」の原罪を糾弾する慎治は激しい自己嫌悪に押しつぶされてしまい、深い闇に蹲ってしまうのである。

慎治は過去の「和人」の罪業を知り、その子孫として罪の重さに押しつぶされてしまっている。この先祖の罪に責任を感じている慎治の表象を考察するにあたり、テッサ・モーリス・スズギが述べる“連累”^{インフレーション}の概念が参考になると思われる。彼女は“連累”という概念について次のように説明している。

“連累”ということばでわたしは、わたしたちの過去との関係は、ふつう“歴史責任”ということばで表わされるものとは多少違うのではないか、もっと幅広い関係ではないか、と言っているつもりである。暴力行為あるいは抑圧行為を犯す者が、一般に認

められている法的・倫理の意味で、その行為の結果に責任を負うのは当然である。しかし、たとえば一九四五年よりあとに生まれたドイツ人は、ホロコーストに同じような意味で直接の法的責任を負っているわけではない。あの恐ろしい事件を直接ひきおこしてはいないからだ。(中略)

しかしその一方で、あとから来た世代も過去の出来事と深く結びついている。理由はいくつかある、まず、あとから来た世代は、歴史上の暴力や弾圧の行為をひきおこした責任こそ免れるかもしれないが、多くの場合そうした行為の結果としての恩恵をうけている。(中略)

しかしもつと広い意味でも過去への“連累”がある。今生きているわたしたちをすっぽり包んでいるこの構造、制度、概念の網は、過去における想像力、勇氣、寛容、貪欲、残虐行為によつてかたちづくられた、歴史の産物である。こうした構造や概念がどのようにしてできあがったのかはほとんど意識されない。しかし、わたしたちの生は過去の暴力行為の上に築かれた抑圧的な制度によつて今もかたちづくられ、それを変えるためにわたしたちが行動を起こさないかぎり、将来もかたちづくられつづける。過去の侵略行為を支えた偏見も現在に生きつづけており、それを排除するために積極的な行動にでないかぎり、現在の世代の心のなかにしっかりと居すわりつづける。そうした侵略行為をひきおこしたという意味ではわたしたちに責任はないかもしれないが、そのおかげで今のわたしたちがこうしてあるという意味では“連累”^七している。

慎治は、寛政蝦夷の乱と言う過去の暴力行為の上に生きている。慎治

は「和人」が「アイヌ」から奪った土地で生まれ育ったという点で、寛政蝦夷の乱と“連累”している。またテッサ・スズキは「今生きているわたしたちをすっぽり包んでいるこの構造、制度、概念の網は、過去における想像力、勇気、寛容、貪欲、残虐行為によってかたちづくられた、歴史の産物である」が「構造や概念がどのようにしてできあがったのかはほとんど意識されない」と述べているが、慎治は寛政蝦夷の乱を調べ上げること、現在の自分を取り巻く状況の成り立ちや周囲の人々が抱く差別意識なども明らかにしている。しかし慎治はその段階でうずくまってしまっている。現状を変えるための「積極的な行動」を彼は起こすことができないのである。

その現状を変えるために必要な「積極的な行動」は、慎治と旅を共にした啓子に期待されるだろう。作品の末部において啓子は自分自身も「和人」の一人であるという認識を、慎治との会話の中で獲得する。

あなたは、なんにも知っていないさ。

と彼は、ガムを噛みながら言った。

夷人と呼ばれた人間たちの側から見れば、あんだだって、シャ

モの一人だ。(中略)

……あんだ、シャモと呼ばれる側の人間だと、そういう実感はないだろう。それは、北海道の人間たちの問題でしかない、はじめるからそう思い込んでいる。(二三三頁―二三四頁)

「和人」としての自己認識を獲得した啓子は、「和人」としての罪の意識に押しつぶされ、うずくまってしまふ慎治を見て次のような考えを抱くようになる。

彼の内側にあるシャモを、自ら討ち果すことができない限り、彼のからだを流れる“佐兵衛の血”を、一滴も残さず吐き捨てる事ができない限り、おそらく彼の傷は癒えきらないだろうし、たとえ癒えたとしても、あとに大きな傷痕を残さずにはおかないだろう。

彼は、傷の疼きに犯された眼で、ぼんやりと空を見あげて動かない。

わたしは、バッグの中の薬瓶を指先でまさぐりながら、彼をこの儘にしては置けないのではないか。……と、また御節介な思いがうごめきはじめる。

いや、御節介じゃない。いま、わたしに、彼の、シャモの傷の疼きが伝わってきている。

(二八〇頁)

作品の最後で「和人」の傷の疼きが慎治から啓子へ伝播し、啓子は慎治が抱える「和人」傷の痛みを共有する。しかし啓子は慎治と異なりその罪の重みにうずくまることはない。彼女は慎治とともに、「和人」としてその痛みを乗り越えて行こうという前向きな姿勢を見せる。おそらく彼女は自分も含めた「和人」の「心のなかにしっかりと居すわりつづける」差別意識を排除するために「積極的な行動」を起こすだろうし、慎治もそれによって救われるだろうことが、この疼きの伝播とそれを受け取った啓子の様子から想像できる。

この「和人」の痛みというものは、「和人」として感じる罪の重さの差などの差異はあるものの、これまでの三好作品でもそのほとんど中心人物が抱えていた痛みだと言えるだろう。しかし、その痛みが中心人物以外の他者に伝播するということはこれまでなかった。そし

てその痛みの伝播が、北海道の人間から東京の人間へ伝わったという点も特徴的である。前作「シヤクシヤインが哭く」のあとがきにおいて三好は『アイヌ問題』とは、実はアイヌ人（またはアイヌ系日本人と名乗る人びと）のみの問題ではない。北海道に住む人間全体の問題、いや、日本人そのものの問題なのである^八と述べている。先述した本作の最後において北海道から東京の人間へ「和人」の痛みが伝播し、その伝播した人間が「積極的な行動」を起こすだろう描写は、まさに日本人全体で「アイヌ・和人問題」を考えねばならないという三好の意識の表れだと考えられる。

五 「見る」ことの再獲得

本作は、啓子についての次の一文で終わられる。

次第に霧に包まれようとしているクナシリの島影を、雑草越しに望みながらわたしは、ふと、死なせてやる事もできなかった全身麻痺の若者の、じつとわたしを見上げた表情を思い起こしていた。
(二八〇頁)

作品の最終場面で「和人」の痛みを共有し、「アイヌ・和人問題」を慎治とともに乗り越えて行くこうとする啓子が最後の最後に想起するのは、彼女が「見る」ことを放棄した患者であった。本作が啓子の患者についての思いで終えられている点は、これまで述べてきたようにこの作品を「アイヌ・和人問題」を起点により広い問題に接続しようとしているからだと考えられる。

このより広い問題への接続という点は、現代において「アイヌ」「和人」を取り巻く問題を考える際にも有益であることが指摘されている。

マーク・ウインチェスターは次のように述べる。

平取村生まれの作家・鳩沢佐美夫は「対談・アイヌ」(一九七〇年)の中で「アメリカの黒人問題」について触れていますね。そのとき彼は、「僕は、人間！ というあたりからこの黒人問題を見つめたいんだ」と言いました。「すなわち、そういう視点がね、アイヌ問題にも当て嵌まるんじゃないか、ということ――」。(…)「一アメリカの黒人問題じゃなく世界の“人間に対する問題”として捉えた、その視点です。「連続する問題」だからこそ、差別に抗する力も、常に領域横断的でないといけないと思います。」^九

「対談・アイヌ」は一九七〇年一月に『日高文芸』第六号に掲載された。これは鳩沢佐美夫と匿名希望の「おんな」との間で行われた対談を文字化して載せたものである。その対談の中で鳩沢はアメリカの黒人問題を話題にし、「おんな」にどのように考えているか問う。「おんな」は次のようにこたえる。

なんかこう遠いもののようにも思うけどもね。自分が要するにウタリだっていう点から考えた場合、身近に感じるね。今はさ、自分自身が意識しているものがないから、はつきり言っただけ埋もれているけれども、もしそういうものに直接ふれた場合、感じるだろうね。ああなるのが当然じゃないかな。またああいうパワーがね、ウタリにもあったらな、と思うことがあるよ。⁺

アメリカの黒人問題と「アイヌ」の問題を接続して考えるべきと考え

る鳩沢は、この「おんな」の返答を受け、これらの問題を接続して考えることの必要性を次のように力説する。

ね、だから、僕は、人間！というあたりからこの黒人問題を見つめたいんだ。すなわち、そういう視点がね、アイヌ問題にも当て嵌まるんじゃないか、ということ——。今、あんたがああなるのが当然だといったが、最近の国際情勢一つをとっても僕もそんな気がする。一アメリカの黒人問題じゃなく世界の“人間に対する問題”だってね——。だから、そういうものに呼応した形の活動は日本にも結構あるわけだ。でもね、日本自身の国内の人種問題となると、なんか少し悠然とかまえずぎているように思うんだ。そういう動きはあるにはあるが、特にアイヌ問題となるとね。^{十一}

三好がこの「対談・アイヌ」を読んでいたことは、「シヤクシヤインが哭く」のあとがきで述べられているため明確である。三好は鳩沢の「人間に対する問題」という観点を受け止め、「アイヌ・和人問題」をより領域横断的にとらえる必要性に気付いたのだろう。「アイヌ・和人問題」を他の差別問題と接続する、そしてその他の差別問題から「アイヌ・和人問題」を見つめ直す、そのようなやり取りが行われなければならないと三好は考えたのだと思われる。そして三好は「人間に対する問題」で物事を考えるにあたり、「アイヌ・和人問題」においても他の差別問題においても、「見る」ことが非常に重要になると判断したのである。

六 おわりに

本作は「和人」社会から「見る」ことを放棄された寛政蝦夷の乱を

題材に、北方領土はかつて「和人」が侵略によって「アイヌ」から奪った土地であることを指摘し、都合よく歴史を隠蔽する「和人」の罪を糾弾している。ここまでは他の論者も指摘している通りである。その糾弾は過去の描写と慎治による「和人」批判により成り立っているが、慎治が「和人」を批判する時、その「和人」という括りには自らも含まれており、最終的に彼は深い自己嫌悪にうずくまってしまう。本作においてより注目すべき点は、これまで何度も三好作品で描かれていた「和人」の贖罪意識、「和人」の痛みを他の「和人」が共有するという点、そして「アイヌ・和人問題」を他の問題へと接続しようとする点であり、それらは高林啓子という人物によって成っている。啓子に大きな衝撃を与えた患者は「ジョニーは戦場へ行った」のジョニー・ボナムと類似していると表現されている。身動きがとれず口もきけないまま生き続けているという状況は確かにジョニーに通ずるが、その患者はジョニーと異なり四肢があり、眼も見える。その姿は「物の言えないアイヌ、哀れなアイヌ」^{十二}を連想させる。患者を「アイヌ」と設定すれば、より鮮明に想起させることができるだろう。しかしあえて「アイヌ」を描かないことで、「アイヌ」に限定しない様々な社会的弱者がこの患者に代入可能となっている。このような患者の設定は「ジョニーは戦場へ行った」を通して「見る」ことの重要性を訴えるドルトン・トランボの姿勢を借用しつつ、「見る」ことを放棄された様々な社会的弱者の存在を描き出していると言えよう。

最後に啓子が「見る」ことを再獲得し、彼女の前向きな姿勢で作品が閉じられている点からも、様々な差別問題と向き合い、それらと接続しながら「アイヌ・和人問題」を「人間に対する問題」という視点から考えていくことに三好が希望を託していることがわかる。タイトルの「人間同志に候えば」という文言は、寛政蝦夷の乱において「和

人」が「アイヌ」を処刑した正当性を主張するために用いられた言葉でありこの言葉を作品のタイトルとすることで「和人」の卑劣さを痛烈に批判している。それは「アイヌ」を差別しつつ都合のいいときだけ「アイヌも日本人だ」と考える、現在も依然として存在する「皇国史観」をも批判していると言えよう。しかし「人間同士に候えば」という言葉通りの意味を考えるならば、「アイヌ」も「和人」も同じ「人間」だということであり、「アイヌ・和人問題」を「人間に対する問題」としてとらえようとしていた三好の考えそのものだと言える。「人間同士に候えば」というタイトルは、「和人」の過去の罪業を批判すると同時に、今後の「アイヌ・和人問題」を考えるうえで、重要となる視点を提示していると考えられる。

注

- 一 石川郁夫『三好丈夫―告発と贖罪・短刀と突き出す腕の勁さ』十四頁
- 二 岡和田晃編『北の想像力―《北海道文学》と《北海道SF》をめぐる思索の旅―』七五六頁
- 三 『アイヌ民族否定論に抗する』一七四頁
- 四 三好丈夫『アイヌの歴史―神と大地と獵人と―』一七一頁
- 五 東村岳史『戦後期アイヌ民族―和人関係史序説―1940年代後半から1960年代後半まで』一九二頁
- 六 『ジョニーは戦場へ行った 映画パンフレット』二頁
- 七 テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』三四―三六頁
- 八 『シャクシャインが哭く』二七六頁
- 九 岡和田晃、マーク・ウィンチェスター編『アイヌ民族否定論に抗する』十頁

十 鳩沢佐美夫『沙流川 鳩沢佐美夫遺稿』一五八頁

十一 鳩沢佐美夫『沙流川 鳩沢佐美夫遺稿』一五八頁

十二 鳩沢は「対談・アイヌ」の中で、昭和四四年に行われた参議院の予算委員会の質疑応答の中で用いられた「物のいえないアイヌ民族先住民」という言葉を、「和人」に対する皮肉と「アイヌ」に対する自虐の両方の意味で使用している。

(香川県大手前中学・高等学校)